

# けんこう処方箋

北海道柔道整復師会会長 萩原 正和



ほっかいどう

水曜 生きる

木曜よむ・語る

金曜楽しむ

土曜考える

火曜学ぶ

## 柔道整復術、モンゴルでも注目

見渡す限りの大草原に、円形テントの「ゲル」。そこから、わずかに聞こえてくる馬頭琴の音……。モンゴル。この異国の地にも、柔道整復術はある。

面積が日本の4倍ほどあるモンゴルは、首都ウランバートルを除くと多くの国民が遊牧をして暮らす。馬を操り、羊を放牧する自給自足の暮らしや、若者から中年まで男たちが取り組むモンゴル相撲など、生活にケガがつきものだ。ところが、大草原に病院はない。骨折や脱臼は放置され、ひどい変形障害が残ることも多い。



イラスト・佐藤博美

え、身の回りの物を活用して治療に当たることを得意とする。例えば、手術をせずに骨折のズレや脱臼を治す。最大の利点は、手術による傷痕がつかないの、感染の心配がなく、手術道具も必要ないことだ。

ギプスがなければ、厚紙やペットボトルなどを代用する。身近にある布を裂いて包帯にし、針金を加工して添え木を作り、腕をつるす三角巾の代わりにポリ袋やスカーフを使う。

モンゴル国立医療科学大学や付属看護学校で医師や看護師を志す学生も、柔道整復術を学んでいる。この医療教育は、今年で9年目になる。きっかけは、大相撲の元横綱・朝青龍関がケ

ガをした際に柔道整復の施術を受け、その効果に感銘を受けたことだった。

私も何度か滞在したが、モンゴルの隅々まで日本の柔道整復師が教育に行くほか、来日しての研修など学びの場は国内外に及ぶ。最初は手術をしないことなどに驚かれる。でも、ぎこちなかった研修生の手つきは立派なものとなり、モンゴル医学生に教える立場になっ

ている者もいる。モンゴルでケガをしたら、まず柔道整復術を施す。そんな未来も近いのかもしれない。

柔道整復術の広報・普及活動は、これまでポルトガル、ブラジル、カンボジアでも行われている。大事なことは最新の機械や物品ではなく、現地にある材料をいかに活用するかという、知恵や技術を教えることだと思ふ。

活動を強化する一方、病院の財源不足による設備・機器の老朽化が問題となっている。都市部の病院でも血圧計、聴診器、注射器など基礎的な器具、消耗品、試薬が不足している。手術を

しても退院後のリハビリテーションはなく、関節の機能障害を残す人も多い。このような環境で、柔道整復術が力を発揮する。日本古来の伝統医療は基本的に体一つで治療できるう